Mother India　Part 4　pp.221-317　　30/06/09

中谷純江

Interlude:　Mr.Gandhi

アシュラムで糸を紡ぐガンディー

Mayo「アメリカへのメッセージは？」→　Gandhi「この糸車の音」

Chapter 17:　Salvation Army の罪

なぜイギリス支配後に何年もたつのにインドは貧しいままなのか？

→例えば、インドの貧しさを決定づけるものとして Cattle Question

・1919－20 年の家畜センサスによれば、ミルク用家畜 146,055,859 頭。このうち 50%は経済価値がない。それらが消費する食物は、年間＄588,000,000。イギリス領インドの土地歳入の 4 倍にあたる喪失。

・ヒンドゥー指導者は、牛を神格化←ご都合主義をとる

死に際に牛のしっぽをつかむ

乳、ギー、ヨーグルト、糞、尿をあわせたものは、意図的な罪をも浄化

尿は浄化あらゆる不浄をきよめる→尿を飲む習慣

・牛の静かなねむそうな目

愛に囲まれている内部感情の表現⇔インドでは活力のなさ、人間への近接、瞼の外側が切断

＜ガンディーの秘書 Mr. Desai の見解＞

・英政府は共有の牧草地を没収。土地歳入の増加。ミッショナリーへの提供。共有地の私有化。→牧草地の減少。イギリス支配下で牛の劣化がすすんだ。

・いかに広い牧草地が牛に必要かをアメリカの統計を引用して説明。

＜Mayo の批判＞

・インドにはない土地の使い方。過放牧から土地を守るためのローテーション。半乾燥地帯では、耕作地の 3/5 で家畜飼料を栽培。→インドは目を開くべき。

・むちをつかわないことに小さな美しさを見て、子供じみた愚かさによって貴重なものを台無しにしている人物（Gandhi）に対するイタリア人専門家の意見→穀物のローテーション、飼料栽培の必要性

・フランス人旅行者の記録によれば、ムガル期においても牧草地はすでに不足していた。

・インドの家畜がおかれた状況はもっとも悪い牛、使えない牛を育成するための考案。

・牛による作物の被害

＜イギリス支配の悪影響としての牛の飢餓説は正しいか？＞

・イギリス支配以前まで、盗みの横行、強盗、終わりない争い、無秩序

・イギリスによる秩序の確立。平和の樹立。伝染病や飢饉のコントロール。→人口と家畜数の増加。それゆえイギリス政府は人々の必要性に応じて穀物を栽培する土地を与えた。

・インド人は自分たちのために食物を栽培し、母なる牛のためには栽培しなかった。そのため牛が飢えることになった。罪はイギリスや salvation army にあるというのだろうか？

Chapter 18:　The Sacred Cow

＜政府の実験農場＞

・熱帯地方では、牛は育たないという問題がある。イギリスはバンガロールで熱帯に耐える牛を開発。15 回の授乳期の後もまだ乳をだすことができる。

・ラクナウでは、Mongina という混血牛を開発、Edna は酷暑気も乳量が減らない。その他、Sanuwal や Push などを政府は開発。selective breeding, crossing, better feeding, housing によってインドの牛の問題（近親交配、飢え、感染、悪い種との混血）を征服。→「酪農」の基礎を確立

＜二重目的の自己矛盾＞

インドの人々が受け入れる用意があるなら、利益は彼らの手に用意されている。しかし、インドではミルクと肉でなく、ミルクと筋肉の２つの目的が重視される。これは一方が他方を無効にするもの。

＜酪農普及における問題＞

・実験農場は、エジプト・クローバーの導入。牧草を貯蔵する方法（サイレージ）のデモンストレーション。種牛を人々に提供。

・政府の農場ではイギリス人 breeder が作業全般を監督しているが、インド農民にとってこれらの作業は全く異国のもの。農民を教えるべき官僚は農民や家畜には関心がない。

・cattle-breeding は文盲の人々にまかされ、牛は健康を損なって哀れにもどってくる。→「支払う必要のないものを大事にしないのは人間の特性」。農民は家畜を良くするために支払おうとしない。

＜インドのミルク供給が低い理由＞

1.　飢え
2.　悪い種牛からの繁殖
3.　搾乳機間を延長するために卵巣を取る習慣→肉として売る（国の資源の流出）

インドの町では、乳のでていない牛を維持できない。他の場所で飼う計画もない。それゆえ搾乳期間がおわると殺す。

＜牛の屠殺＞

ムスリムの犠牲祭で殺される牛の何百倍もが商売目的で殺されている。地域の人々は分け前を得ているため、感情を悪くしていない。一方で、その牛を売る人物は、ムスリムがヒンドゥー寺院の門前で牛を殺すことに対し、結果は同じであるのに暴動をおこす。→このトピックは吟味が必要。

,

＜牛に対する拷問＞

インド人はすべての命を尊ぶと語る。この言葉には動物に対して、われわれが思いやり(humanesss)と呼ぶものが見える。しかし、インドのあちこちで動物への拷問が見られる

・過重な荷をつむ役牛
・搾乳期間をのばすために性器に棒をいれる慣行
・高価な染料を採るために牛にマンゴーの葉のみ与える→長く生きられない
・オス牛の遺棄、子牛には 1/4-1/2 カップのみの乳しかあたえない、死んでしまうと皮で人形をつくり、母牛のミルクを誘う。
・田舎では森に連れていってしばっておく。即座に殺さない→極端な苦悩。野生動物の餌になる

＜野良犬の問題＞
牛の死体などを食べてふえつづけ、狂犬も多い。ヒンドゥーは犬に対して気をとめない。犬は穢れ。
→狂犬の駆除について、Young India での論争：駆除を命じた人も、駆除をおこなう人も罪か？宗教は動物の去勢をみとめるか？

＜ガンディーの応答＞
ヒンドゥー教が生き物を殺すことを罪とみなす事実に二つの判断はない。ヒンドゥー教は供犠のために殺すことを himsa（暴力）ではないと主張するが、これは半分の真理でしかない。避けがたいことは罪であるとみなされない。科学的酪農は犠牲のための殺戮に含まれる避けがたい暴力を許すのみならず、称賛する。しかし、世話をして動物の命を保護する役目である人間、精神性で癒すような行者のような力をもたない人間、しかし狂犬を駆除することができる人間が、義務の対立に直面している。犬を殺せば罪である。殺さなければもっと深刻な罪である。だから彼は罪の少ないほうを好む。
野良犬の問題がこの聖なる ahimsa の国に途方もない規模であることが非常に残念である。狂犬を駆除するのは罪かもしれないが、狂犬を捕える責任のある者もいる。野良犬に餌をあたえるのは罪である、罪であるべきである。

＜Mayo の見解＞？？？
Ahimsa の国では、最も少ない罪が飢えた犬にパンを与えることや、犬を困窮からのがれさせることである。ガンディー氏はたとえ狂犬にも後者の方法を認める。このため、ヒンドゥー教徒の抗議が殺到し、彼は時代の重荷に大きなため息をつく。残された方策の去勢は、宗教的に禁じられているため、犬の困窮はインドの困窮と同様に解決の糸口がない（循環する）。

Chapter 19:　The Quality of Mercy
＜動物保護法による牛の環境悪化＞
動物への拷問禁止法→効果ない。人々は動物に憐れみを感じない。法制化は警察がワイロをとる機会に。
1. 重い荷物を運ばせない。
2. 搾乳期間をのばすための慣行(Phuka)禁止
3. 警察官に傷病動物を殺す権限を与える。所有者が反対するときは獣医の証明必要

＜ボンベイ管区における動物保護法案についての議論＞
・同じ環境にあるのが人だったら、殺せるだろうか？
・動物に区別をつけていないのが問題。牛と犬はいっしょにできない（牛は Pinjapole へ 。
・獣医のポストを維持する費用の問題。苦しんでいる動物をたすける以上に高くつく
・もし獣医がムスリムで、病気の牝牛の殺害を認めたら、町の平和がくずれる
⇕
・野獣を殺して楽にしてやるのが、もっとも人間的。
・傷づいた動物を殺害するか、Pinjapore へ送るかは所有者がきめる。権力が行使されるのは動物か無視されて、公的な場に放置されているときだけ（インド人の支持を得る努力）

→「慈悲」をめぐる二つの考えの対立。結局、cow と bull は除外。法案は骨抜きに。ものを言わない動物が自身のからだで支払うことになった。

Chapter 20:　In the House of Her Friend

ガンディーによる Cow Protection Societies の設立。豊かな商人の寄付によって、牛のアシュラム(ghaushala)を維持。

＜gaushala の悲惨な状況＞

牛の命を救うことで神の恵みが得られるとヒンドゥー教徒は信じている。しかし、実際には彼は屠殺者に良い牛を売り、そのお金の一部で悪い牛を買う。それを gaushala に送り、宗教的メリットとお金をえる。→ガンディーも、寄付をする人も gaushala をみたことがないのではないか？

・うじがお尻をおおいつくし、10 日もすれば心臓に達して死ぬ。それまでまたねばならない

・アメリカ人の専門家：ごまかしや詐欺の横行、誤った管理、動物は全くケアされていない。私のアドバイスを必要としていない。オフィシャルの認可スタンプが欲しいだけ。

・イギリスで酪農の訓練をうけたインド人：宗教的情がここに生き物をつれてくるが、そこで情はおわる。全くの無視。道でゴミをあさり車にはねられたほうがまし。

・カップ一杯のミルクしか与えられない子牛。残りは売る。

・餌は穀物の種、乾いた藁（栄養はないがはらの足しに）

・後ろ脚が 1 本切断された牛（乳搾りのときに蹴るから）

・不具の子牛。鳴き声のために購入され、ghushala に送られる

＜The Association for Saving Milch Cattle from Going to the Bombay Slaughter House＞

裕福な商人による運営。牛が屠殺場におくられている数やミルク不足の現状を分析。dairy plant の運営、ミルクの売買、牛の売買、科学的ケアを与える。アメリカ人からは未熟だが、インドの基準からは輝いて見える。スタッフは全員身内だが。

Chapter 21:　Home of Stark Want

インド人は Golden Age について語るのをしばしば聞く。しかし、それはイギリス支配がはじまる 1900 年以上も前に失われたものだ。

＜インド史＞

Chandragupta 王朝からムガル王朝まで。常に外部の侵略者によって支配。民衆はつねに支配者の犠牲に。大衆について書かれた公的記録はない。西洋人の旅行記からわかこと

・干ばつや伝染病にくるしむ人々（貧困、子売り、奴隷、人食、死体の骨を小麦にまぜる）。

・貴族の家には無数に奴隷がいる。象は金銀でかざられるが奴隷は衣服すらない

・豊かな商人はお金を土にうめて、貧しい暮らしをする（ちょっとでも見られると、奪われる）。

・村々の生産者は、生存に必要なものを除き、すべて国家に吸収される。再分配は全くなし。

・インフラ、教育、医療などは全くない。法的な防衛もなし。国の発展には何もなされない。

・土地は肥えていながら、農民はひどく抑圧。税を払いきれない村は、妻子が売られる

・農民が逃げて、田畑が荒涼としている。

・ムガル支配が及んでいるのは平原部だけで、旅は強いボディーガードが必要。臣民と同じ数の反乱者がいる。強盗の出没。統治者が強盗から賄賂をえている。

・軍隊を維持するかわりに、宮殿を女性でうめつくす。壁の中に世界中の喜びをもつ

・運命とカーストの教義がもつ強い影響力

＜イギリス統治＞
・イギリス・東インド会社軍は各地の反乱を鎮圧
・1858 年に擦り切れたみすぼらしい服を着た、病気の、貧しい、古い Mother India は、ついに別世界との際にたった。そして、彼女の盲目の目を頭上に掲げられた新しい旗に向けた。以後、今日まで彼女になされた、信じられないほどの誓約が実行されてきた。彼女の最後の主人が彼女にもたらす建設的奉仕、民主主義、民衆の福祉という贈り物を、ずっと奴隷であった彼女がどうやって信じることができようか？

Chapter 22:　The Reforms
イギリス領インドで、政府の形が徐々につくられてきた。現在の段階を示すと、
至高権力――イギリス女王と国会（インド省・インド参事会）
インドにおける最高権力――総督とインド政府
中央政府と州政府の下に議会（上院と下院）

＜改革による地方自治への努力＞
・インド人下院議員の構成：人種、宗教でバランスのとれた選出
・有権者：財産制限、7.5 百万、女性にも
・州政府を二つに分割
1.　州知事と州議会（すべてイギリス王の任命）→保留事項
2.　州知事と州大臣（知事による任命、すべてインド人）→移管事項

＜両頭政治＞　cf. 法律上の形式をととのえた茶番
・インド人を政府に責任をもって参加させることを目的とする。
・第 1 次世界大戦におけるインドの忠誠にイギリスは報いようとした
・ガンディーがサティグラハを開始した時期に設立が重なったのは、めぐりあわせが悪い

＜メカニズムの価値を理解しないインド人＞
・この統治スキームは、安定しない外来のものであり、インドの土には奇妙なもの。よって、まるで高い時計を与えられたいたずらな子どもように、口に指をいれて互いに争う。ねじをはずし、宝石をとりのぞく。
・民主主義の代表制について語法には精通していても、言葉の背後にある思想については知らない。専制政治が Civic Spirit を成長させていない。ルールを全く知らない。イギリスが教育的努力によって、中産階級（法律家や専門家）を育てたが、中産階級を構成しているのは、500 年前まで民主主義を否定していた人々。彼らが「民衆」について語るのは、西洋生まれの代表政治の単語においてのみ。

＜1926 年冬の下院議会の様子＞
・政府の提出した法案に対し、スワーラージストによる全く建設的でない意見、軽蔑の表現
→彼らはイギリスの誠実さを攻撃
・分割統治への反対
→彼らはインド自体の利益を、自分勝手な利害のために踏みにじっている。代表者は、貧しい Mother India と自分たちの関係をどう理解しているのか？

＜インド人代表が民衆の代表ではない理由＞
Reform を批判する以前に、インドには Electorate（選挙をおこなうための地盤）が存在しない。

1. 8%以下の識字率、都市部に集中。印刷された言葉が全く届かない大部分の土地、文盲な農民、政治への無関心。都市の政治家は農民と接触しない。Constituency という概念自体が影響力をもたない（ex. スワラージット党の下院議員の一人が政府の機能を止めようとして、途中で退席した。しかし、党の人々の誰一人として彼の選挙区の人々に相談しなかった)。西洋では、個人の利益やネポティズムは恥。しかし、インドには道徳がない。パブリック・オピニオンが存在しない。
2. カーストの利益にもとづく行動
3. ヒンドゥーとムスリム間の政治的争いのために、宗教によるパトロネージを避けられない

⇒もっとも信頼できるインド人行政官でさえ、政府への忠誠をもたない。たくさんの問題をかかえているが、とにかく新しい憲法は歯車をまわし、インド人の地位を改善している。にもかかわらず、総督を痛烈に批判するインド人。
アメリカ人「よく、そのように叫べますね。あなたの欲しいものを与えてくれたのに」
インド人「なぜ、叫ぶべきでないのですか？叫べば、いつも何かを与えてくれるというのに」

＜真理に与える価値、定義の違い＞
なぜインド人は、事実とは完全にくいちがう statement をスピーチの間にはさむのか？
高名なベンガル人：真理は存在しない。正しいと間違っているは相対的なもの
長くインドに住むヨーロッパ人：ヒンドゥーにとって、すべての物質は存在せず、それに関する statement も嘘である

Chapter 23：Princes of India
インド帝国は、イギリス領インドとインド藩王国（面積の 39%、人口の 23%）にわけられる。イギリス政府と藩王国は条約関係にある。
a) 内政不干渉
b) 国全体の利益にかかわる外交に関しては許可が必要→resident の駐在

＜藩王国を訪問＞
・いくつかの藩王国はとてもよく統治され、大部分の藩王国はよく統治されている、しかし、一方ではゼナーナの中では、ねたみや陰謀や突然の失踪。他方、民衆は非常にまずしい。王族と人々の関係は、大きな美しい花と弱った貧しい根。イギリス統治下では不可能と思われるほど、華やかなパレードやセレモニー
・藩王国の支配者が行政を resident の手に委ねたところでは、進歩が効果的になった。→歳入が人々のために使われる。道路、橋、近代的病院の建設。貿易や産業の振興、国庫の安定。正義がすべての人々に届く。しかし、息子が即位すると、20 年かけた国の発展の仕事がたった 3 年でだめになった。余剰金はすべて浪費され、税は急増。月に＄500 の給与で置いていた医者は辞めさせられ・・・最後にはまた古い友人の Resident のところにきて、自分たちといっしょに住んでくれるようにと頼んだ。「Sahib もどってきて、平和と正義とよい暮らしをください」
・イギリス支配による pax Britania の享受。
・イギリスがインドから撤退することが藩王国の終焉につながることを認識